

regional EF により RVMI を他の群と区別することは困難であったが、RVMI では右室の下壁心尖部付近の regional EF が軽度低値をとる傾向が認められた。心ブールシンチは右室梗塞の診断の一助となり得るばかりでなく、左心機能との関連において右心機能の評価が可能であり、臨床上有用な検査であると思われた。

28. Protein A を用いた新しい RIA Kit の検討

山田謙太郎 (浜松医大・放)
真坂美智子 吉見 輝也 (同・二内)

現在、RIA の B/F 分離法には、二抗体法、PEG 法、チャコール法などが広く用いられている。PEG 法は、反応時間が短く操作が簡便であることから多くのキットに用いられているが、一方では、検体のタンパク濃度の影響を受けやすいといった問題点も指摘されている。

今回われわれは、B/F 分離剤に Protein A を用いて PEG 法の利点を生かした RIA-gnort AFP を使用する機会があり基礎的検討を行った。

操作方法は、指示書に従って行った。日差変動、同時再現性は、10 ng/ml 近くでは CV は約 8% であったが、その他の濃度では 5% 以下であった。キット添付の希釈血清による希釈は満足できるものだった。キット添付の標品による回収率は、99.9%~110.2% であった。二抗体法との相関は、 $y=1.33x-3.5$ $r=0.994$ であった。タンパク濃度を変化させた検体の PEG と Protein A による非特異的結合率は、PEG ではタンパク濃度により変化していたが、Protein A ではほぼ一定であった。

29. 骨盤内リンパ節シンチグラフィーの検討

吉田 宏 安田 鋭介 松尾 定雄
矢橋 俊丈 市川 秀男 木村 得次
金森 勇雄 中野 哲
(大垣市民病院特殊放射線センター)
竹内 敏視 磯貝 和俊 (同・泌)
佐々木常雄 石口 恒男 (名大・放)

骨盤内悪性腫瘍症例において、骨盤内リンパ節への侵襲の有無を知ることは、治療方針の決定、あるいは予後の推定に不可欠な問題である。従来より行われている Bipedal lymphography では最も必要とする内腸骨動脈

領域リンパ節が全く描出されない。今回われわれは、Gardner らや Menon らの行った Prostatic lymphoscintigraphy および Ege らによる Iliopelvic lymphoscintigraphy を施行し、若干の知見が得られたので一部症例を含め報告した。〔結果〕(1) 前立腺刺入法、坐骨直腸窩刺入法において骨盤内リンパ節の描出が可能であった。(2) 前立腺刺入法により、前立腺所属リンパ節が、内腸骨リンパ節、閉鎖リンパ節、仙骨リンパ節であることが確認された。(3) 前立腺肥大症にて前立腺刺入法、坐骨直腸窩刺入法はいずれも、内腸骨リンパ節、総腸骨リンパ節、傍大動脈リンパ節の描出は良好であったが、閉鎖リンパ節、仙骨リンパ節の描出は低率であった。(4) 前立腺肥大症、上部尿路疾患にくらべて進行した前立腺癌、膀胱癌、子宮癌では描出されるリンパ節が減少し、リンパ節への転移によるものと推察された。以上のごとく本法は骨盤内悪性腫瘍症例における所属リンパ節への転移の有無を知る指標の一助となるものと考えられた。

30. Gallium-67 citrate の肺門集積について

久保田 元 西村 哲夫 道家 義和
深谷 哲昭 後藤 修一 中島容一郎
畠山 真行 大場 覚 金子 昌生
(浜松医大・放)

正常範囲内の胸部 X 線所見を示す患者 69 例について ^{67}Ga -citrate の肺門集積度を検討した。撮像は 95 KeV にて行った。27 例 (39%) に胸郭中央部骨集積像よりも強い肺門の描出をみた。肺門への集積度に著しい左右差を認めたものはなかった。患者群の年代が上がるにつれ、肺門の集積度の高い例が増加していくが、特に何歳を境にして肺門集積の強い例が増増するなどという現象は指摘できず、徐々に集積の増強が起こっているように思われた。またその際、古い胸膜炎、結核の瘢痕、肺気腫、老人性間質陰影の増強等の inactive な X 線上の変化と、 ^{67}Ga -citrate の肺門集積との間に、密接な関係を見出すことはできなかった。

31. RCT の基礎的検討——その 1

江尻 和隆 百石 悟 浅野 智子
竹内 昭 佐々木文雄 古賀 佑彦
(名古屋保健大・放)

テクニケー社製ガンマカメラ・オメガ 500 に 2 種類